

マンダリンの歴史から

〔マルゲリータ皇后とマンダリン〕

中野二郎

1869年時のイタリア皇太子妃マルゲリータ殿下がベリザリオ・マッテーラの下にマンダリンの練習を初められ、

御料のマンダリン製作をパスクワレ・ヴィナツチアに命ぜられるに及んで、マンダリンは俄かに脚光を浴び、上下一般のちよう児となり、

ベルレンギ、デ・クリストファロ、ブランツォーリ、マティーニ、ピアンキ、ムニエル等の演実家作曲家は相継いで世に現われ、

滋（ここ）にマンダリン音楽の基礎が作り上げられたのである。

マルゲリータ妃殿下は1851年11月20日、ジェノヴァ公フェルディナンド殿下の唯一人の王女として御誕生、

1868年4月20日トリノーに於いて皇太子ウンベルト殿下と御結婚、翌69年11月11日、皇子御誕生、この皇子こそ、

ウンベルト一世の後を継ぎ第二次大戦の終るまで（46）イタリア王位に在ったエマヌエレ三世である。

1878年ウンベルト一世即位とともにマルゲリータ妃殿下はイタリア皇后となられ爾来二十二年1900年ウンベルト陛下崩御によって皇太后となられた。

これより先1870年エマヌエレ殿下御誕生を寿ぐ為にナポリに大博覧会が開かれたが、

この機会に初めて百人以上の奏者を擁する大マンダリンオーケストラが、ジョルジョ・ミチェリの作曲になる海浜博覧会小夜曲」を演奏した。

この事は明らかにマルゲリータ妃殿下のマンダリン修学がマンダリン界の発展上如何に大きい影響を与えたかを物語るものである。

1880年にはイタリアプレクトラム楽界の権威を網羅した合奏団「皇后マルゲリータ陛下合奏団」

（チルコロ・ロヤーレ・レヂーナ・マルゲリータ）がフィレンツェに生まれた。

之は皇室から（或は皇后自身から）相当の御下賜金が出て維持費に充てられた模様で、

指揮者としてはマティーニ、グラッイアーニ・ワルテル、後にムニエルなどが立った。

この合奏団の演菱が、斯界に与えた影響は全く想像以上であって、各都市には陸続として合奏団が興り、独創的な曲が続いて生まれるに至った。

願ればマンドリン楽勃興の端緒は明かにマルゲリータ陛下の開かれたものであって、イタリアでは陛下のことをMadre D'Italia（イタリアの母）と呼んでいるが、当（まさ）にマンドリンの母と呼ぶべき方である。

ムニエルは「エマヌエレ・三世の母君マルゲリータ陛下は非常に教養の高い婦人で細心な勇敢さを以ってマンドリンとギターを学ばれた。

我々はイタリアで長足の進歩をしたマンドリン音楽に対する大きな愛を女王に負っている」と言っている。

当時ローマのマンドリンヴィル・トゥオーソ、「コスタンティーノ・ベルトウッチ（1841-1931）」は1873年初めて宮廷で初演。

1878年（明治11年）にはパリーの博覧会に於いて彼の率いるマンドリン合奏団が成功を収め、イタリアに帰るや、マルゲリータ女王の御招きでこの合奏団はモンツァの皇室別邸で、多くの貴顕紳士淑女を前に演奏、

又1883年トムマーズ皇子（マルゲリータ女王の唯一人の弟君で、明治6年と12年の2回イタリア海軍士官として来朝している。）

の結婚の時も皇室庭園でベルトウッチ指揮でマンドリン演奏会が開かれた。

1881年（明治14年）から1893年（明治26年）までの頃はフィレンツェでは音楽家も富めるも貧しきも貴きも凡てマンドリンをとりあげて弾いたと言う。

前記マルゲリータ陛下マンドリン合奏団は1887年から88年にかけて連続100回以上の演奏会を開き、屢々（しばしば）宮廷の行事を飾ったが、

中でも、フィレンツェの町を訪れたセルビア女王を迎えピアッティ宮殿に開かれた盛大なレセプション、とパルミエーレ別邸に於ける英国女王の別宴で、

この盛大な歓待には沢山のマンドリニストが参加したと言う。

これらの出来ごとは略（ほぼ）100年近く昔のことで我々には遠いが、マルゲリータ陛下の名前を見るのは

イル・プレットロ主催の第二回作曲コンクールに一位入賞したアメデオ・アマデイの「海の組曲」にマルゲリータ陛下下賜の大金牌が贈られたことぐらいであろうか。

マルゲリータ陛下は単にマンドリン音楽だけでなく広く一般芸術（音楽、絵画、詩等）に対して深く理解され庇護された多くの逸話が残っている。

従って各界層からの信頼も厚くマンドリン畑からも多くの作品が献呈されているので記しておきたい。

陛下から直接の愛顧を受けたのは前記ベルトウッチでマンドリンとピアノで結婚の花束を献上している。

表紙は多色刷りで、真白な気高い花と未来永却不易の緑の葉を以って愛の神アドーニスの聖木として神殿を飾ったミルトを描き、

御紋章と金文字金枠で彩られてある。

そして同じ作者は18のマンドリン練習曲集を献げている。

相当高度なもので彼の三巻の教則本の上位にある力作である。

彼がこの書の巻頭に掲げた献呈辞は、

A S. A. R.

La Principessa Margherita

Stella D'Italia preziosa gemma de casa Savoia

per Elevatezza D'Ingegno

per virtu per Bonta gentilezza D'Animo

per Nobilta di cuore onorevole e grande

Questi studi di popolare armoniosa

Strumento

CONSTATINO BERTUCCI

In attestato di profonda devozione e rispetto

fidente nella sovrana

Benigna accoglienza

Umilmente offerina

最上段に王冠を戴き S. A. R. は S ua Altezza Reale.

これ以上の賛辞はないほどに褒めちぎり、これ以上にへり下り様のないほど恐懼謹言している。

ジュゼッペ・ブランツォーリは1891年歴史的名著と言われているリュート教則本を献上。

イタリアからアメリカに移ったジュゼッペ・ペッティネは作品46番「マンドリン第一コンチェル」を献上した。

<イタリアのマンドリン芸術の発展に間断なく大きな庇護を与えられたイタリアの輝く星にしてイタリアの母なる女王マルゲリータ陛下に献げ奉る。>

の文字が見える。

デ・クリストファロはその作品30番「イタリアの星を。

エルネスト・ベクッチは「銀婚式」

エットーレ・リッテは「ミヌエット」

イグナツィオ・ビテリは「イタリアの母へ」

ジュゼッペ・ベルレンギは父君エマヌエレ二世の崩御に際して「悲しき思い」をいづれもマルゲリータ陛下に捧げている。

又1896年ジョヴァンニ・グインダーニはエマヌエレ三世（当時皇太子）とモンテネグロ

の王女エレナ殿下の御婚儀に「Elena」を、同じくエドワルド・メッツアカーポは「ナポリタランテラ」を献曲している。

マルゲリータ陛下の孫に当るエマヌエレ三世の第一王女ヨランダ姫の誕生に当っては、ルイジ・プロヴェーラが「ヨランダ序曲」を献曲、

同じく第一皇子ピエモンテ皇太子（後のウンベルト二世）にはマネンテが作品360番「ピエモンテの皇子」を献げ、

曾孫マリア・ピア王女には同じくマネンテが作品434番「子守唄」を贈っている。

モンテネグロ王国は第一次欧州大戦（1914－1918）にセルビアに組して敗戦後廃国と

なったがイタリアのエマヌエレ三世の妃は前に記した様にモンテネグロ王の王女であるので両国は姻戚関係にあり、

カラッチェは作品90番「踊る人形」を、フランチャは作品422番「ローマの思」をモンテネグロ皇太子に献呈、

ベルレンギは「サヴォイア・ペトロヴィチ」を作曲して敬意を表している。

この他当時のマンドリン界を牛耳った「皇后マルゲリータ陛下合奏団」に捧げられた曲は無数にあり、指揮者であったグラツイアーニ・ワルテルのロンバルド風セレナータ、マリオ・パッチのマリネルラ序曲、ニコラ・ロマーノのアンダンテ・カンタービレ、

その他此処で初演されたのを誇りとしてそのことを楽譜の表紙に記録したものが沢山ある。

最後にマンドリンに関係したことではないがマルゲリータ陛下の逸話を記して置こう。

1893年（明治26年）5月マエストロ・トレドは時のイタリア皇后マルゲリータ陛下に、彼の発明になる楽器を拝呈した。

そして皇后と宮廷の貴顕紳士淑女及びマエストロ・マルケッティ（1831-1902）の前で演奏した。

この新しい楽器はアルモニウム・エオリウム（Armonium aeolium）と呼ばれるもので、

音楽を全く知らない者でも弾くことが出来るという。

皇后はマエストロ・トレドの演奏を一時間以上も辛棒してきいた挙句仰せられた。

「そうゆう大それた発明はおやめなさい」。

ベッカストリーニは北方フィレンツェ近くの生まれで、此の附近の炭坑の抗夫として働いていた。

戦争開始に先だつ二年前の1912年の秋、二十歳で工兵連隊に入営した。

開戦と同時に彼も所属部隊と共に出征した。

オーストリアの国境近く、パスピヨ山の附近で、所謂（いわゆる）高原戦に従事した。

彼の部隊はイタリア工兵隊中で、爆発隊の名称で通っている。

その名の示す通り、爆破作業をやるのである。

パスピヨ山は、妙義山を裸にしたような陰阻な禿山で、之を挟んでの戦闘はさんごうを掘るにも、坑道を作るにも、

又敵のそれを破壊するにも単に勇気と戦術と武器の戦でなくて、実に忍耐の戦であった。

ベッカストリーニのこの戦闘中に於ける様々の勲功は一々ここに述べないが、

彼の働きが如何に深く認められたかということは、従来 of イタリア陸軍のレコードを破って、

殆ど目に一丁字無いに等しい一兵卒の彼に対し、突然少尉任官辞令が与えられたのを見ても分る。

この辞令書をベッカストリーニは謹んで辞退した。

手紙一本よう書けぬ者が将校の列に入っては、イタリア陸軍の不名誉である。

自分にそれだけの素養の出来た暁に、改めて拝受しようと言うのであった。

この時以来、彼はパスピヨ山のさんごうの中でA B Cから勉強を始めた。

「人間の意力は地球をも動かす槓杆。」で彼はそれから数年ならずして、イタリアの文壇にもてはやされた快著「思い出の記」を始め、

既に「心内の感動」「イタリア人の持つべき義務」など数冊の著書まで出して、今は一かどの文士になっている。

隊長の代理をして、彼の連隊に於ける第五兵隊を指揮して、トナーレ山の（サルベッティのマンドリン合奏曲にトナーレ山の夏の夕暮という組曲があるが、

トナーレ山は風光絶佳の地で第一次欧州大戦時の激戦地として知られている）シマ・デ・ソルチという所で作業に従事していた或目のこと、

爆発薬の調合を部下に命じて、それを監督していたが、兵士の一人が間違えてゼラチンの煮えたって

る鍋の中に入れるのを見るや、

彼は大声疾呼してそのぐるりに立っていた部下を逃げ去らせ、自ら素早くその鍋を手にして谷に投げた。

がその時遅く鍋は彼の手を離れ落ちる瞬間に爆発して、彼の両眼は全く潰れ、左腕は根こそぎにもぎとられ、右手は枯木の梢の如くにつん裂けてしまった。

除隊となって廃兵院に入ってから、彼の精魂は少しも衰えぬのみか、却って益々内面的に深く強く働き始めた。

彼はとり残された二本の指をたよりに、タイプライターを打つことを研究し始めた。

そして幾ばくもなく筆

で書くよりも速く正確に書き得るようになった。

その間には従卒から新刊の新聞雑誌を読んで買うと同時に、点字で作られた書物を、力限り読むことを怠らなかつた。

彼の署名の立派な文章が国内に於ける一流の新聞雑誌に出るようになったのはそれから一年とたたぬ間のことである。

ここに失明後の彼を男泣きに泣かせた美しい一つの挿話がある。

1917年の5月、ローマに於いて傷病兵の盛大なる勲功表彰式が挙行され、宮中の諸殿下を初め内閣員等以下皆列席した。

この日の名誉ある勲功者の中で、ベッカストリーニがその最たるものの一人であったことは言うまでもない。

会場は当時彼の居った廃兵院マルド・ブランデンの建物の中でその日朝まだきから院内はときめいて混み合った。

今日を晴れの彼は、きちんと身じまいをすませて、最後に靴をはこうとしたが手さぐりでは見当らない。

式の時間は迫って来るので、彼はいらだってしきりに従卒の名を呼び続けたが答がない。

その時廊下から少年の声で「君何か御用ですか？」と言う者がある。

「僕は靴をはきたいのですが」と答えると、「それなら僕助けてあげましょう。

紐の加減はこれで如何ですか？」と少年はまめまめしく親切に靴の紐まで結んでくれた。

この時、廊下に一人二人ならぬ人数の足音がして、「殿下はそこに居られましたか」と驚いたようにその中の一人が叫んだ。

この少年こそイタリア皇太子殿下だったのである。

而もベッカストリーニの感激は之に止まらなかった。

身に余る表彰の言葉と共に、イタリアの国家が与える偉勲の輩がこの二本の指にかけられた時、しとやかな衣ずれの音がして、誰やら一人の高位の女性が自分の傍に来たことをベッカストリーニは感じた。

マルゲリータ皇太后陛下であると、誰やらが注意した。

皇太后陛下の声として、「あなたのことは細大よく聞いております。

タイプライターをそのお手で非常に巧に打たれるそうですが、今日の晴れの場所で打って見せて頂けませんか？」

持ち運ばれたタイプライターに向って座った。ベッカストリーニの肩に片手をかけて、陛下は彼の後に立ちながら、肩越しに機械の紙面をのぞきこまれた。

満場固唾を呑んで寂として声なき中に、彼は興奮して打つべき文句をも考え出し得ぬらしかったが、やがて、彼の手は箒の如く疾く動いて、点滴のような音が続けざまに場内の空気をふるわせた。

紙面には唯二語……「陛下よ感泣す。」と打ち終るや、ベッカストリーニは空洞のような両の限からはふり出づる涙にぬれた顔を、

がぱっと紙面に伏せた。すすりなきの声はそこここに聞えた。

この時屋内に漲（みなぎ）るものは、ただ人道の大きな波であった。

マルゲリータ老陛下は、宮中の皇太后陛下である前に先づ、失明無手の愛児を抱いて泣く一個の街頭の母となって其処に立たれた。

ベッカストリーニは、陸軍大臣の名によって彼の胸間にぶら下げられた黄金の勲章や勲記を離れて、一個の単純なる少年として其処に伏して泣いた。

1926年1月4日イタリア皇太后マルゲリータ陛下は崩御せられた。

いち速くミラノのイル・プレット口誌には一月号にマリオ・バッチによって哀悼の言葉と陛下のマンドリンに関する数々のエピソードを載せて追憶し、

我が国でも武井守成氏がその誌マンドリンギター研究にマンドリンの母の崩御として追悼文を載せている。

イタリアの百科辞典を見るとマルゲリータ陛下の事績に関する文献の書名と著者20、残っている陛下の肖像の画家15名の名前が載っている。

前に記したようにマルゲリータ陛下の嗣子エマヌエレ三世の妃（皇后）エレナは、

モンテネグロ王ニコラー世の息女で、イタリア皇室とは近しい姻戚関係にあったが、そのモンテネグロ王は第一次欧州大戦でオーストリアに敗れて退位亡命し、主にフランスを転々として再び故国の土を踏まず、モンテネグロ王国そのものも消滅していった。エマヌエレ二世のイタリア統一。（1861）後さしもの栄光の道を辿ったサヴォイア王家も、第二次世界大戦後（1946）イタリア共和国の成立により廃位されてポルトガルに亡命されたときく。名誉と勲功を称えられた者も、又之を授ける側の王家も、栄枯（たた）盛衰世の習いとはいいながら、凡ては歳月とゆう巨大な波に押し流されて、殆ど跡方もなくなろうとしている。これらのことを僅かに知る者の語り草と、やがては忘却の深淵に沈む王命にあることを思うと、方丈記の作者ならずとも、世の儚（はかな）さ、無常感に打ちひしがれるのである。